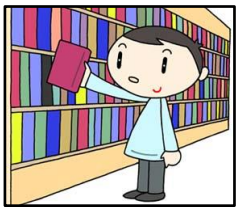
おすすめ図書

２０１５年
９月８日号



『その日のまえに』　作者：重松清　　文春文庫

＜書評より＞

僕たちは「その日」に向かって生きてきた――。昨日までの、そして、明日からも続くはずの毎日を不意に断ち切る家族の死。消えゆく命を前にして、いったい何ができるのだろうか……。死にゆく妻を静かに見送る父と子らを中心に、それぞれのなかにある生と死、そして日常の中にある幸せの意味を見つめる連作短編集。

ある日告げられた死の宣告。普段と何も変わらないはずの日常が、医師の口を通じて非日常へと変わったその日から何ができるだろうか。不治の病に冒された１人の女性ではなく、いつか訪れる“その日”を、「最後の最後の、もうぎりぎりまで、二人の元気な顔を見ていたいの」と語り、２人の息子をもつ母として生きる。

――あなたは、彼女の生き様から何を感じるだろうか――

７つの短編小説を集めた本ですが、それぞれのお話が別々ではなく、ストーリーがどこかで交差する連作の形をとっています。１つのお話が短いので読みやすく、つながりをもっているので読み応えのある一冊です。